

繪本拾遺信長記 十

~ 19
3564
23



門 13
號 3564
卷 23



拾遺信長記後篇卷之十

目錄

羽柴統元守因本教寺本

本の吉中團征伐

教如上人踞踏よく化益

亞一條本教寺造立の事

本下中女教如上人と踏の森又別

清門綾等本の後の後活

拾遺信長記後篇卷之十

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 燹
藏 書

秀吉の修二光秀と信長

東六條本願寺造立之幸

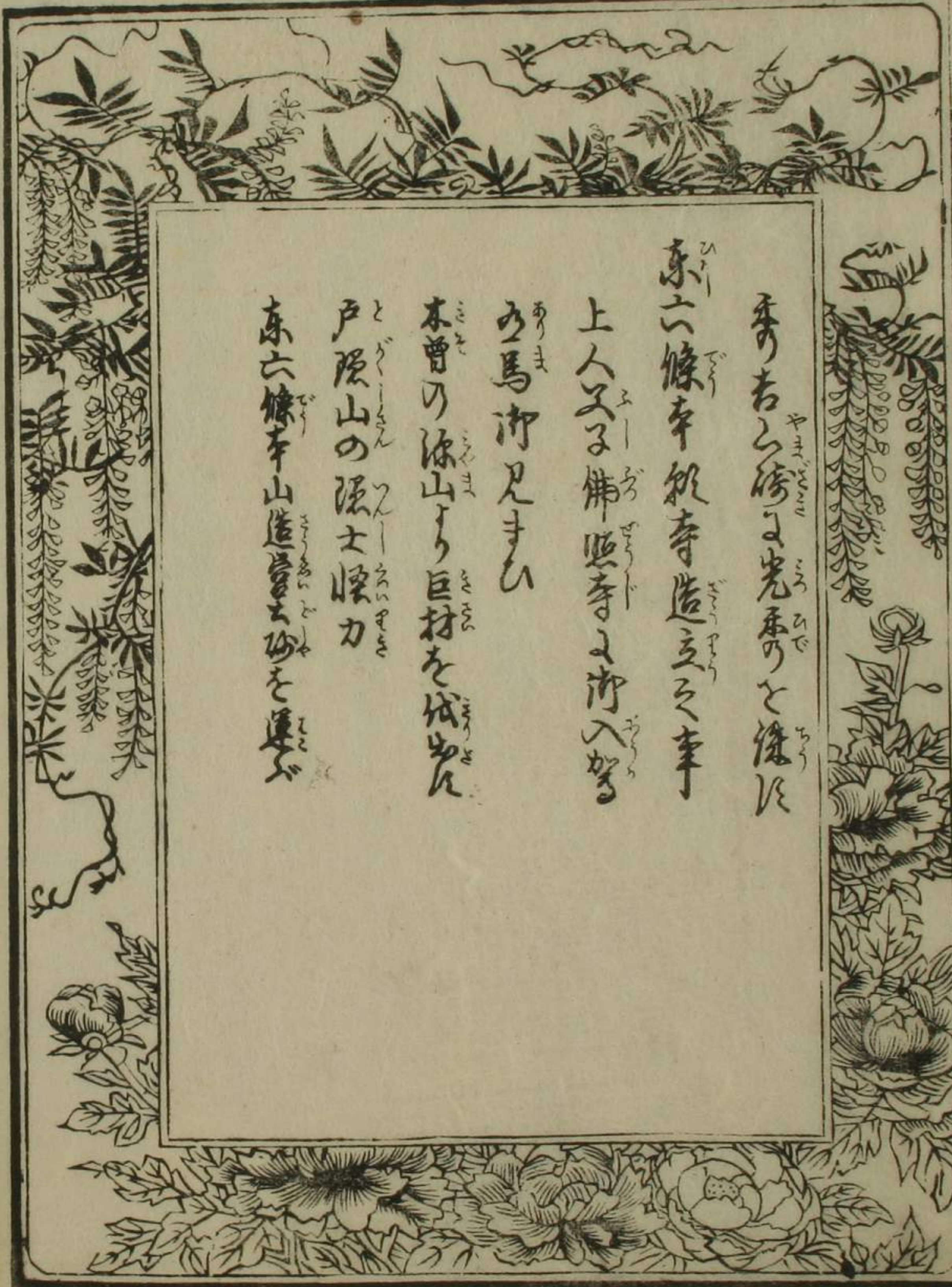
上人又子佛眼寺之河入智

の馬御見まし

本曾の深山より巨材を伐出

戸原山の源士懐力

東六條本山造營之由を運ぶ



繪本拾遺信長記後篇卷之十

羽柴統元守因本願寺

母對信長云の家臣羽柴統元守秀吉の中國征伐の大なるに
彼中なる松の城を水責は毛利吉川小早川の三家と對陣
信長云の加勢を討たる小六月二日京都本能寺に抄ひて
信長光秀が乃小賊せらと終るは三日の夜又ゆへられど
秀吉を討てて光秀を討てて光秀の弟ひは依
人とのとては毛利家と和睦とす中國の陣と構ふる本
願寺の城を造りて登りて居るが此おろし本願寺の影門敷如
上人の石山用城の後密に紀州路の森へ入りて居りぬども
表向又上人御勘當の所ありしが信長云の安と候り響の森



秀
中
國
征
伐



を出させ給ひ攝州と申は「さうは秀吉のいそふかたうしひ未
 らせ良き本下才御を」に「流傳の森へ返らせむる中教寺は
 い懇款信長が如く羽柴籠首より教如上人を」に「城
 うるの由る智謀の秀吉何様流傳子細を多くと教如上人い
 とれた家老中阿法橋を以て其疑を以て思ひ合せ給ふる本下才御
 謹でやうるの至人秀吉今度七若信長云の吊ひ軍の由中
 國より弛のがう中阿法橋を以て其疑を以て思ひ合せ給ふる本下才御
 勃化はし給ふをあられよ見たり秀吉石内より申給ふ
 の河内ひやさんへめ家老才御を」に「流傳又子見来の儀は少
 い方り即秀吉が書簡中教如の如く申給ふる如く封せし書状一
 通とに」此の中阿法橋と申は上人へかくと申と秀吉の書簡と

持ぐ上人封と一切て見給ふ新門御勤の如く申は「さうは秀吉が
 弟のようなく申流傳の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 教寺宗門御勤の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 ぬきは申は申は申は」の文をかり教如上人はく「さうは
 流ありて後者の口と書簡の文御勤の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 い新門が口より申は「さうは秀吉の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 の事かろぶ」に「さうは秀吉の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 が中阿法橋を以て其疑を以て思ひ合せ給ふる本下才御を」に「流傳
 度右大臣殿不意の申は「さうは秀吉の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 んうを信長と申は「さうは秀吉の如く申は「流傳又子見来の儀は少
 よるをかり光秀人なる所は「さうは秀吉の如く申は「流傳又子見来の儀は少



教如
上人
姫治
化委

圖本信長言後卷十

四

思ふは先秀の信長を討を以て上人を欺きとてし門後の助カ
 を乞ひ秀吉が吊ひ合戦を防ぐんと計るべし上人謀つて先
 秀の荷贖し給うる事公裁せし運匠はばし出家の事あり
 遠い所へ天誅のがき給ひし秀吉を公裁せし小田家のお大いよ
 く本願寺と懇談ありといふ事南宗門は概とばし終るは法
 藏と申すべからば上人悪くそむき義と申ひ秀吉が吊ひ合戦
 の合体し一臂の力を助け運匠明智とてし終るは小田家
 の氏族古老の口中皆上人の心算と感心しとてくを降儀
 信仰の門後とてらばし且運匠誅伐せし終るは天下靜謐の後
 の秀吉が出家の大檀越とてし系傳と申ひて本堂再建とてき
 との旨折紙紙を以て申合ありとていと委細つまじく小濱説はし

ませしうば上人かごうかく悦ばばし秀吉の笑見よく我心よ
 叶つり既先秀の俊若を以て我をいさるべし人ども我いづく
 運城は一味とんぐんや秀吉が吊ひ合戦をいとなまば我門後と
 ていそく小先と助くばしと仰らば本下は助をもるもこま
 く御食應ありとて委細のつらさを申合あらば返書と仰ら
 ば路の端へ歸し終る

西二條本願寺造立之奉

羽柴藤原身秀吉の明智が計策の裏とてた教如上人とい
 たらひ本願寺へ因り新門勅免のありしをたけひつら
 かり於如上人心中に流しよるるに終り密に又畿内の門
 後へ廻文を以て秀吉が軍と助け終る事と申ひしは藤原大



本下才女
 教如上人
 臨書の森
 列る

日本傳長言後卷廿



諸門後
秀吉云
後浩



勅化意くせ給りて天正十三年同八月西上人橋州天濱の森川
 傍とてふ又移領し給ひぬこれ此節秀吉云紀州根来寺の
 衆徒希く日國の國人を征せんが爲に南國へ軍馬をばしむけ
 給ひ多る小貝塚の軍兵往來の甚るれば不慮の狼藉もあらん
 即ち秀吉云の命よりて天濱川傍よりうつり給ひて又御堂と
 建匠しく教年此の頃せ給り即今の佛照寺これ秀吉云
 天下平定ありてさきの紛争も治ひ京都西の桑畑川に於て
 本教寺と御建立ありて如上人御父子とむ久給り附は天正十
 九年八月之儀に御開山聖人の法徳つらまらるく予人京東山
 大谷の本教寺焼亡してこのころ馬馬の中と志の死百發の内と
 まぬが二百二十有七年の今より再び京都に御本寺造らる

ありて御宗門まじりくさうへ廣きり多るを難き御法をりき其
 御多年の父孫元多かり此年の十二月廿日如上人御多又十
 歳まで遷化し給り此附を國秀吉云朝鮮征伐の御指揮せらる
 給しとて此の國名護るの津又立陣して御はらる小教如上人
 より御父上人遠方の旅を飛脚とて言上し給ひこれいふま
 ら給り御相續の御先印を「下」する其文は曰く
 門跡不慮之儀要き御次第終言語以御中其方懸領
 之儀いふる御相續法度以下雲中付勅給り要き御書
 相互覚悟様肝要に托者本門跡本房は彼相續其方
 登那に理光院移小御坊相副一處在之而可托以貞
 門跡理光院引廻母儀は若外を以尚渡御彈正慈業



秀吉
山崎
光秀
信長

日本信長記後卷十

院本下守助可申忍

極月十二日秀吉云御朱印

平教寺門跡

又教如上人の御母云へ下されし御文又曰く

門跡をんうのりせひなき次升中ひん中うらうら
去うぐうよき子達御りらひの采被着ては影門
跡そうり中うのりそそひまき跡とつご家のそけい
中うよかくご成され中坊へうらう今まそのおとくす付
影門主のあへりまう院をうらうそそくお保りま
これありてまうるぶくいなと局にこよ入ひあるうらこ
十二月十二日ひでうら御朱印

山のうへ

かくのどくはし下されしうらうぞ教如上人ありがうらう頂戴ありて
本坊よりうらう終ひ中教寺の別當職を飾り終ひ此付まをり教
如上人御堂の山の御被又母をせしが此度中坊へうらうせられた
まふより御母云と御令升理光院阿茶丸殿を上人の信せ
終ひ山の御籠へうらうせらるる尤う小理光院殿付の家老門
後の中より教如上人法燈相承し中寺相續のり理光院
理光院殿こそ中坊相續あふき御のりかうらうと御母云へまふく
内談又及びこれの内々謙論まらうくそ一定せは先年
中教寺石山退去の旨取如上人の四月九日又御退去の旨と
影門教如上人の七月まで御籠城はうらうを門後の内より其



上人
又子
佛照寺
町入
駕

國本信長言後卷



ありま
馬
市見系

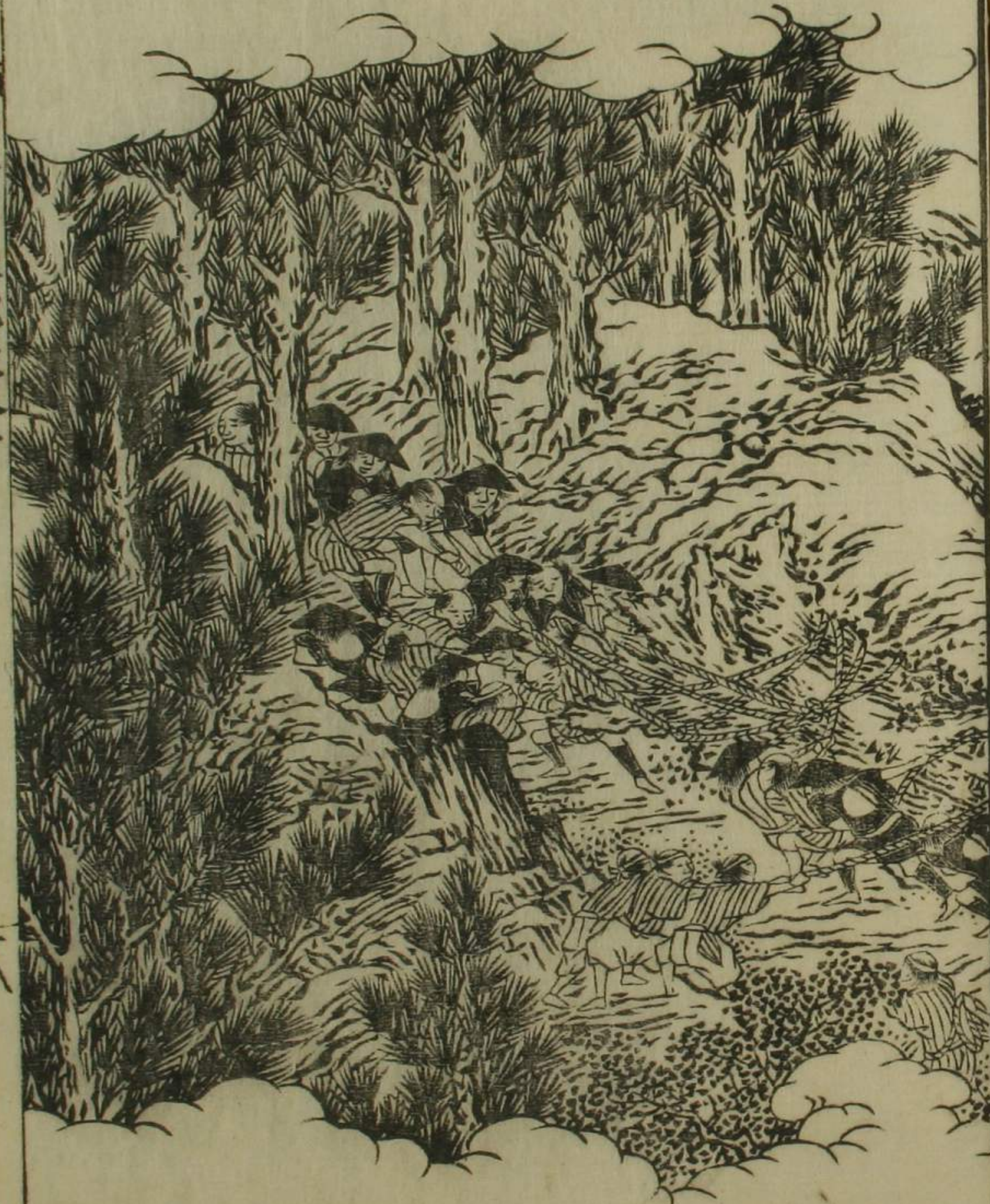
画本信長訓後卷下

比本教寺相續のつらと抄ひくハ理光院ニ讓狀つらと受てけあり
 之御慈悲の御知を以て先皇如く本意のまゝ小付付ら下と
 らいみ難うは」と派と後ハ御教ひみつる小を固波」百五九跡目
 のつら熱氣相續と入みるの順道なり兒をさ」長才をまゝ謂は
 と物々瓜石ニ推入して我宗親愛聖人男をまゝみさくみさくは
 束の女子是信尼ニ跡目を譲り八代運如上人二十一人のまゝく
 ハ男実如を以て世終るは是地は」只法燈を相續」吾祖の宗門
 を以てつらと慈愛とため」伯仲叙の論よりまゝつらハ我宗門の習
 いより悲まゝか」武門の御世終るは少」く受ていさハ先皇
 如く本意のまゝハ男を以て理光院ニ讓狀と譲りてけハ何ぞ
 御慈悲を以て先皇の心よりつらと下されは是地ハ我宗門

且榮承く慈悲と載」後」と病志のく」後」教ひ後ハは」
 大勇のを固らまども厄云の為源」御心よまゝつらつら子細の
 何のつら理光院ニ跡目ハ中付べきなり」と宣い京都聚樂園
 白雲次云へまゝの旨は受らま」本教寺教如上人ハ源居とへ
 理光院」本坊を譲らま」と教命」後ハ是」依て本教寺の
 家老門後の面」この委付あるを固の御知」教如上人ハ何の御
 譲りの以て源居付らま」と一應を固へ御教の上老」南」
 定め後人」つらと」中」教如上人元来大徳智恵と徳を以て
 高僧」御知」ま」は」先皇の言奉」は」後ハ是」
 固の命令」つらと」を」を」や」後」
 且ハ」奉」つらと」は」は」後」

退去しべき方なりとて一應の河不審よし及びは日年九月二十
 一日本寺と出て河合牙理光院殿(本坊を譲り終ひ再びゆゑ
 る河館へ移住しは)しつ河原居の格を押ししましとてさう
 けは日十月十日日理光院先昭十七歳にて本教寺住持職を居
 り法入を準如上人(市)も亦法入の此村本坊を法準如上人法
 燈と掲げ教如上人の院居して山の館を押ししは信心の門後本
 寺系流の度ふはううに河原居の佛殿を拜し終ひ法善の流
 を流しとては本坊と南面をとりとて河原居と唱へ河原居の方
 の小方の日裏をいれ河原居と稱し何と勝り方のけしりうく
 日毎又系流のしつりなり其後十二年の交干と絶て慶長八年
 癸卯教如上人の住せ終ふ本寺建立せらるるなりと公す

台命ありて東六条馬丸の地面を縄張し既又造営終始たる
 是より門々又諸國の門後教をいれ集り本門を宗旨
 月増小繁榮致教び去石を運び材本と巡りし夏夜乃さうい
 るく精刀を造しとて營々たる此河原居の梁は月増大木巨材
 を用くの深山よりいれいれいれいれいれいれいれ其用
 當るべき大樹はし安又信州本曾の深山よりいれいれの巨樹
 あり其高さ三十丈あまり根の周り百圍よりなりとてさ
 うん本山の梁本坊よりとて難く伐削しぬきとてし余り
 の大木をいれ膠くぐり大綱よりとて此深山よりいれいれいれいれ
 綱よりとて門後の石佐老の男女いれいれいれいれいれいれ
 る安又河原居深山の林に一人の隠士あり姓名致理と名は



本曾の
深山より
巨材を伐
り出ん





とく
戸限の
浪士
腰力

画
本
作
上
古
本
様
式
一

人と交るるのを奴と日向宗門を降依せりといふと拈佛坐
 の親家聖人善等の名号と妻念佛の如化りありと見え
 へりたり此強士彼巨材の引けがきき本所の山と暮り
 門後の人と云ひやろの巨材を引けは水の力と借らん
 人かそていぬと云ふは此山中樹木は埋ま谷あつたが同
 と云ふは地脈と地理と考ふる本曾河の水
 源の此わたりと云ふは試と云ふは見後へりといふ門後の男女
 心もろくの思へども後と云ふは付るれが強士の云ふと云ひ
 生勢りたる樹木を押さけ谷あやみと撥くろ小その不
 より僅に丁と云ふは軽と云ふは深く水多の谷ありといふ
 此わたりは谷ありといふと云ふは遙りに申すれが張水激と云ふは

て其海を中と云ふは人々これを見て大き小勢き此強士
 こそ唯人は行はれぬ佛の化なりといふと教ふりかきり
 しく其命強士と云ふは強士と云ふは其流をこそ本曾
 川の水源なりといふは其名も此材木を推やと云ふは近國
 近を乃門後を拓き集り老若を云ふは髪と切りて素を割
 と云ふをひて彼大木と云ふは教百人をして引くまきと云ふは
 勤くむらり申すにありは其射強士門後の人と云ひ大木小勢
 をと云ふは母等皆宗祖聖人の洪恩を蒙りたるが此本一ツ
 勤し得べつ門の祖師の大恩を報はるる人々の主也
 いで我一人の力と云ふは二神がまらうと云ふは二王のど
 き勇相をいふは教百人の力と云ふは勤くむらり大木のりといふは

一信の力と云々をいひて一考うりくと見しが思ひしやこの本
 中へくと勅いふ三尺半推しつる是と云々多くの門後
 肝と云ふしある抄びに「の力かやこれぞ人間業とは云々」に
 西方阿弥陀如来の化現とて本寺の建立を授け給ふ物なりと
 ころきどくと云々うり命うぎり根のざり引出さるる押はじ
 くと衆人一日は教をあげぬやくと引わらふるんや谷あひの
 上まぐり引わらぬ世付源士大さ小勢び今心安」と云々少し四と
 ころ岩の中へ身をまわす彼大木に両手かかけぬといふて谷の
 内（投落）ぬ其怪力実の佛の方便と云々ん天物の仕業又
 やと云々者云々云々て思ふと云々強士が言に遠りた深て此深本
 本曾川へ流て終て都へ巡りしと云々東六條本教寺いよやう小

造匠「教如上人門法」といふ後し給ひ先の本寺と西本教寺
 と稱し後乃の本寺を本本教寺と唱へ東西羽翼の如く門後
 の渴仰盛ん繁茂「日念念佛の夢和唱」て云此不遠の極
 樂淨土よとてとて踏躑と云々三心に修の事慈悲教思願
 又法と法性常樂乃如多百歩の外は震動「まに本教一安
 の盛徳時業万代不易の招提なり犹多小戸源山の源まに今
 不思議の怪力をわし深本と引出しつるる見物と云々ぬ本持こ
 と云々教如上人感し思ふ人信州と云々て其人と云々ゆせ
 給ひつる小住し菴に其後と云々うり源士の妙方と云々ゆら
 し見物同へき人ありと云々はと云々中うり都へ歸り上人と
 云々と云々と云々上人と云々云々思ふも其人相と云々

六條本山道管
と砂を運ぶ國



終ハ身の程に十餘りて眼中をどくどく色白く言信明あきの
 言ことば又齒は眼まなこに其相親あひま珍めづ本重幸もとむね又よく似にてるを幸小信こしんの
 の合あ裁は入い入い「これと多おほに其生い死し分わか明あるは此世このよ源もと士し也なり」や幸ゆき
 幸ゆきふはらうとさうと上人あまのひとの意こころ「くゆが」百ひゃくて諸國しよこくの門かど後あと
 恒とこ分わからざる程ほどのりともさせ終つひ人ひとども終つひ又其その在ある所ところ初はじめは
 恩おん儀ぎありしごとくなり

繪本拾遺信長記後篇卷之十大尾

畫工

多賀如圭

壹之卷	市田治郎兵衛
貳之卷	池田長右衛門
叁之卷	藤木全兵衛
四之卷	樋口源兵衛
五之卷	池田長右衛門

六之卷	井上治兵衛
七之卷	市田治郎兵衛
八之卷	藤木全兵衛
九之卷	樋口源兵衛
十之卷	井上治兵衛

文化元年甲子四月

浪華書林

譽田屋伊右衛門

播磨屋五兵衛

和泉屋源七

